

母校の建て替え

菅田 忠志

つゆ入り前のある日 神戸・長田の小高いところにある母校の小学校から往復はがきが届いた。今年も同窓会の案内かな?と思いつながら開いてみると「校舎老朽化に伴い このたび建て替えることとなりました。お別れを参列してください。」との案内だった。

この小学校には 疎開先から帰ってきた昭和²4年から⁶6年の4年間 学年で言えば3年生から6年生卒業までの懐かしい思い出がたくさん詰まっている。昭和¹⁴年に建てられ ⁶⁴年が経過したとのことだから自分と同じ時の流れを歩んできたことに、いっそう感慨深いものを感じた。

返信はがきに「思い出や現況をお書きください」との欄があったので、ひとつ、ふたつ思い浮かんだことを書いて返信した。

当時ユニセフからの救援物資によって始まった学校給食、脱脂粉乳のあの不思議な味と、焼きたての大きなパン。

ミルクは今のような味ではなく、口の中で何度かもぐもぐさせてから、いきおいをつけて飲み込んだものだ。

戦後の混乱期、着ている服は誰も汚れていたが、あのミルクのおかげで、ひどい栄養失調にもならずにはしゃぎまわったのだろう。

「敗戦」という苦い思いの中にも、「あのときはありがとつ」という気持ちが頭の中をよぎっていったのは、子を持つ親となってからのことだったと記憶している。

こんなこともあった。自習時間に5、6人が抜け出して、少し離れた野池に泳ぎにゆき、帰ってみたら鍵のかかった職員室の先生の上には、みんなの

カバンが積まれていた。

家に帰って親にしかられ 翌日教室で前に立たされ 長濱先生に「反省のことば」を大声で公約させられ 少しきつめのゲンコツを1個つつくられたことなど…。

来賓の方々の校舎にまつわるエピソードを聞きながら くだびれた講堂の大きな窓越しに、しとしとと降る雨を見つめっていると ふとしかられたときの光景が 梅雨空のよどんだ湿気をつたって温かくよみがえってきた。

ゲンコツの痛みは消え クラスのみんなの顔が「近々集まるうぜ」とほほえんでいた。